

重要な統合リスク管理の充実・整備

地域銀、新システム導入へ

金融危機でリスク量増大

統合リスク管理感勢事例

リスク資本全体	個別リスク資本	部門毎のリスクテイク量	部門毎の収益	
自己資本	リスク資本	→ 信用リスク	→ リスク	→ 収益
		→ 市場リスク	→ "	→ "
		→ オペレーショナルリスク	→ "	→ "
		→ 流動性リスク	→ "	→ "

※統合リスク管理ではリスク資本の合計がTier1以下にコントロールすることが目安となっていた。

個別リスクの定義

信用リスク	貸出先企業（個人を含む）の財務状況が悪化したときに、金融機関の資産価値が減少などした場合に受ける損失
市場リスク	金利変動や有価証券など価格変動、または為替変動により、金融機関が保有している資産や負債の価値が減少などした場合に受ける損失
オペレーショナルリスク	人為的、事務管理部門、システム部門などで発生する不祥事や不具合などによって生じる損失。システムリスク、事務リスク、法務リスク、人的リスク、風評リスクなど幅広いリスクが存在する
流動性リスク	財務内容が悪化した場合に市場からの資金調達が困難となり、資金繰りに影響が出たり、調達金利が高くなるリスク

IT進展で手法が高度化

国際的な金融危機と景気後退が、金融機関の経営に大きな影響を与えるなかで、統合リスク管理の重要性が高まっている。信用リスクと市場リスクの増大が自己資本に影響を落としているため。

健全性の確保と収益性の向上という経営目標達成の手法として導入されてきた統合リスク管理。環境変化への対応とシステムをレベルアップするとともに、経営判断にどう生かすかが課題になる。

経営判断へ迅速に反映

増加する リスク資本

統合リスク管理とは、金融機関が保有するリスクを計量化し、経営の安定性、健全性を確保する一方で、限られた資本を有効に活用し、収益性を高めるための経営管理手法。いち早く大手行が導入、地域金融機関でもその整備が進んでいる。

しかし、今回の金融危機で株価が下落、市場リスクが増大した。また、景気後退で信用リスクの拡大も懸念されている。さらに、国

注目の新 システム

アジアパンフィック システム総研が開発した統合リスク管理の支

経済資本運営の定着へ

世界規模で金融機関自己資本の充実を求め、経済資本運営の重要性が増している。それだけに、対象のリスクを計量化し、個々のリスク部門に資本を配賦、資本の十分性を検証する統合リスク管理はますます重要になる。

際金融資本市場の混乱で顕在化した流動性リスク問題、バーゼルⅡの拡充で明確になった証券化商品の取り扱いなど、リスク資本が確実に増加している。一方、環境変化が激しいなかで、リスク量を測定するスピードの向上と多様化、さらに経営判断にいかに対応させるかが課題となっている。

例えは、信用リスクの計量化では店別、部門別、地域別のほか大口先や主要取引先、格付け別の期待損失（EUL）および非期待損失（UL）を算出。特に、ITを駆使したシステムのレベルアップが焦点になる。

援システムが注目され、Web上の画面で表示できることから営業店でのEUL管理も可能とした。さらに、価格についても規模によって異なるもの3千万円から5千万円まで導入できる。九州地区地域金融機関で導入に向けて準備を進めており、10行近くの金融機関が検討している。